筑波大学から羽ばたいて

‘つくば”に魅せられた25年

屋上（やがみ）公二郎
ソニー株式会社、MSNC、セミコンダクタテクノロジー開発本部
テクノロジーエキスパート
1982年　筑波大学第一学群自然学類卒業

開学から30年。久し振りに訪れた“つくば”は、研究学園都市としての閑雅な佇まいを見せていた。入学した25年前（1978年）、原野の只中に現れた未来都市の感があったことを想うと、感無量である。遥かに筑波山を仰ぎつつ、緑溢れるつくばの公園通りを逍遥すれば、過ぎ去った学生時代の思い出が木漏れ日の中に淡い点景となって甦ってくる。2003年の今、再びつくばの地に戻り、独立行政法人・産業技術総合研究所にて共同研究をすることとなったのも、本学で学んだことと無縁ではあるまい。

今回、はからずも「筑波フォーラム特別号」への執筆を依頼されたのを機に、筑波大の未来に思いを馳せつつ、自分にとって筑波大で過ごした日々の意義を、その思い出とともに考えてみた。

私にとっての筑波大入学

「国立大学を中心とした新構想の研究学園都市を“つくば”に建設する」。国家100年の計を踏まえた壮大な事業であり、実験であった。当時、高校（都立・九段高校）在学中で、大学受験を前に志望校の選定をしていた私は、この構想に胸をわくわくさせた。旧帝大とは一線を画する新進の魅力を、そして、既成概念に捕われず新時代を切り拓かんとするスピリッツを感じた。この実験に参加したいとの思いで、筑波大を志望した。受験した大学は、筑波大1校のみであった。

“つくば”は、日本の頭脳都市として、今や、世界に認知されるに至り、国を挙げて日本初の研究学園都市を創設した意義に疑問はなかろう。私にとって筑波大への入学は、この創成事業に参加できたということであり、それは、また、筑波大卒業生としての誇りでもある。

筑波大で受けた教育と経験

私は、自然学類に入学し、物理学を専攻した。筑波大は、開学当初より、物理学教育に力を注いでおり、これも大きな魅力であった。4 年次は、磁性物理（物性・実験）を選択した。総じて自然学類の講義は難解であった。入学時の高らかな志とは裏腹に、理学系の研究者になる自信が持てず、実学を学ばんと、大学院には進学せず民間企業へ就職した。就職後は、磁性とは縁のない分野でしばらく仕事をしていたが、紆余曲折を経て、卒業後 18 年たってから磁気工学の分野で博士号を取得した（東北大・博士課程修了，電子工学専攻）。現在は、磁性に関係した研究（伝導電子のスピンと磁気モーメント間の相互作用を利用する研究）を仕事としている。一時期、挫折があったにせよ、結局、原点に戻ったのである。

振り返って見ると、筑波大で受けた教育と経験は、研究者としての原初体験として自分の中に焼き付いていた。言うなれば、それは私にとって卒業後の人生座標軸における原点であったと思う。

研究室の思い出

筑波大での生活では、4年次が一番記憶に残っている。4 年次は、物性物理・実験（磁性物理）の長沢　博 助教授（現・筑波大名誉教授）の研究室に配属になった。先輩もまだ数人しかいない、小ぢんまりとした研究室だった。実験装置の大半は、旧・東京教育大学で使われていたものであり、筑波大のモダンな外観とは対照的に、実験室内にはセピア色の落ち着いた雰囲気があった。ここで、初めて、徹夜実験を体験した。当時はキャンパスの周りにコンビニなどなかったから、ガスストーブの上に鍋を置いて湯を沸かし、ゆで卵ばかり作って食べていた。キャンプをしているような、妙な充実感があった。配属された 4 年生は、ちょうど4人。そのうち、誰かが雀卓をもってきた。ある夜、10時過ぎだったと思うが、実験と称して、実験室のドアに内側から鍵をかけて雀卓を囲んでいた。興が乗ってきたころ、ガチャガチャとドアを開けようとする音がする。一同、ぎょっとして、物音を立てないよう、息を潜めた。居留守を決め込むつもりだったが、今度は、コンコンとノックしてくる。これはごまかせないと、4 人してドアに近寄り、一人が恐る恐る「…誰ですか？」と尋ねた。すると、「私です」と、聞き覚えのある声。長沢先生だった。まさか、こんな時間に、誰も来やしないと高をくくっていたのがまずかった。開けない訳にはいかない。鍵を開けるや否や、雀の子よろしく実験室内に飛び散り、雀卓の上の牌を崩して痕跡を消そうとしたり（明らかに無意味）、電源の入っていないアンプのダ

イヤルをおもむろに回したりと、取り繕ってみたが、状況は一目瞭然。普段、冗談など言わない（いい人なのですけど）超まじめなセンセイだったから、どうなることかと固唾を飲んでいると、当の長沢先生、いつもの穏やかな表情で、「あぁ、…そうでしたか」と静かに一言。特に怒られる訳でもなく、その場は収まり、翌日、一年先輩（M1）の小野田さん（現・筑波大助教授）に事の始終を話したところ、アンプのダイヤルをぎこちなく回してみたくだりで大笑いされていた。20年以上経った今でも、筑波大のことに話が及ぶと、あの晩のことが長沢先生の穏やかな表情とともに懐かしく思い出される。今想えば、人生の喜怒哀楽が凝集したような筑波大でのキャンパスライフであった。

筑波大への期待

社会構造の急激な変化が、社会の多くの分野で起きている。企業の統廃合、現在検討が進んでいる国立大の法人化など、枚挙にいとまがない。一方、情報通信技術に代表されるように、生活に直結する技術革新が、極めて短い周期で起きるようになった。このような時代において求められるのは、非連続的変化に対応できる価値観の多様性と柔軟性である。

筑波大は、他の旧帝大に比べ歴史と伝統こそ浅いものの、逆に、これらによるしがらみがなく、多様で柔軟な価値観を育み易い教育環境にあると言えよう。この環境を維持することが、非連続の時代において筑波大に期待される重要な役割の一つと信じる。

開学から30年が経ち、大手企業、国立研究機関等の社会の第一線で活躍する筑波大卒業生が、私の周りにも増えてきた。彼らに続く筑波大卒業生には、過去の英知を尊重しつつも歴史と伝統のしがらみに縛られることのない柔軟な価値観が備わっているはずである。良い意味での“We are something”の自信を持ち、現在の日本を覆っている閉塞感を払拭すべく、また、21世紀における繁栄の礎を築くべく、果敢に挑戦してもらいたい。

卒業から21年が過ぎた今でも、つくばは、私にとって魅力的な存在である。つくばの先進性に憧れ筑波大に入学した25年前と同様、つくばでのこれからの仕事に、私は、わくわくしている。

筑波大には、開学当初より、既成概念を打破して時代を切り拓かんとする“スピリッツ”があった。ここに惹かれる。今の会社（ソニー株式会社）に入ったのも、同じ理由だったと思う。結局、私は、この25年間、つくばスピリッツに魅せられていたのである。**（やがみ　こうじろう）**